

# 勝林寺寺報

## わたしの仏教（へ承前）

どの民族でも、その民族の古来からの風俗や伝承といわれるものは、「一朝一夕には消しきることはできません。」と見えても、また、復活してくるものです。

古代アーリアン民族が、中央アジアからヒマラヤを越えてインド北部インダス河畔に移動し農耕を始め小さな国家を建てて定着したのは、紀元前三千年前の大昔ですが、このアーリア民族がもつてきた因習は、インドの社会史・思想史のなかで根強く伝承され、また復活しながら、現代まで伝承され復活し続けております。

その一番顕著なものが「カースト」という階級制度です。バラモン（梵天信仰バラモン教の教導者）、クシヤットリヤ（王族為政者）、バイシャ（一般庶民）、シユードラ（征服民・奴隸階級）。仏教はこのような階級差別制度を強く否定しました。

（バラモンは生まれによって貴いのではないか。行為によってバラモンとなるのである。）とは釈迦の有名な言葉です。（『スッタニパタ』）

またこれに関連した思想として「業」（うの思想も根強くあります。業とは行為のことですが、業因業果。悪因苦果、善因樂果。または「親の因果が子に報い」などの単純な因果思想です。

仏教は縁起（因縁生起）を説いてそれに強く反駁しましたが、現代に至るまでこれを言

う人は多くいます。

また古くあつた「輪廻転生」という思想です。業の報いで次の世に悪道に墮ちるというものです。現代に至るまでなんとなくこれを恐れている人も沢山います。これら古くからの伝承を引きつけて、今

日本社会にも、勝手な神仏を創造し、祈願祈禱・占い・迷信などいろいろな疑似宗教が行なわれています。

印度で「大乗仏教」が興隆し、これら迷信や習俗を「破邪顯正」したのでしたが、的外的な論議に終始したきらいもあってその決め手を失っていました。

龍樹（ナガールジュナ）は西暦250年ごろ南インドに現れ、のちへ八宗の祖師）とよばれ全佛教の改革を成し遂げたいわば第二の釈迦として「空・無我」の「大乗復興」を成し遂げました。

親鸞さまも『正信偈』に  
南天竺ニ龍樹大士、世ニイデテ  
コトゴトクヨク「有無ノ見」ヲ催破セン  
大乗無上ノ法ヲ宣説シテ  
歡喜地ヲ証シテ安樂ニ生マレント

と讀えておられます。

「空」「無我」とは、

ひらく言えば、「わたしは」こう見る。俺はこ信じる。など自己中心のものの見方、考え方、やり方のことです。仏教の言い方をするれば「無明と渴愛」です。ほんとうは真実はわかつていらない、見えていないにもかかわらず、あたかも見えている、わかっているかのようにわたしの見解や思考だけに執着しその目からしかものが見えない、姑息な態度といつてもよいでしょう。

指摘されてみると私たちの考え方・思想・行動はすべてそんな「独りよがりな」ものをよりどころにしているではありませんか。

これを「根本煩惱」とよび、すべての過誤・

その他の他にも多數出し物を用意しています。詳しくは、招待状をご覧ください。参加申し込みは、地区仏婦評議員さんまで

二六日（日） 敬老報恩講  
二八日（火） 兵庫教区 総代ブロッサ研修会  
(敬称略)

### ご案内

#### 敬老報恩講

今年も、仏社・仏婦・法輪会の役員が、招待者の皆さんと楽しいひとときを過ごすために、知恵を出し合い、趣向をこらしてお待ちしています。ぜひ、お出かけください。

日 時 平成二十六年十月二十六日（日）  
開会 十四時半ごろ

受付 十時三十分より

二一日（土） 生田俊雄宅 一周忌

二二日（日） 田村ゆきゑ宅 一三回忌

二三日（月） 田中歳康宅 七回忌

二五日（水） 中山隆雄宅 忌明

二七日（金） 敬老報恩講 練習日

二八日（土） 関川一男宅 七回忌

善立寺 報恩講

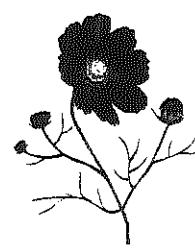
一九日（日） 専福寺 報恩講

二三日（水） 兵庫教区 公聴会

二三日（木） 敬老報恩講 舞台準備

二五日（土） 長專寺 報恩講

二六日（日） 稲木順子宅 七回忌



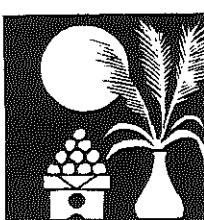
#### 一〇月 勝林寺 予定

四 日（土）	関森敏昭宅 一周忌
八 日（水）	出石組総代会 研修旅行
十 日（金）	兵庫教区 実践委員会

葬儀

八月二十九日

鍛冶屋 中山きぐの様 八十三歳



仏社会長 足立幸夫  
仏婦会長 岸下菊美  
法輪会代表 坂本 貢

### お知らせ

毎月二十六日に行っております「みのりを聞く会」、今月は、敬老報恩講と重なりましたので、お休みとさせていただきます。来月からは、通常通りお勤めいたします。お参りください。

## （二）祖先さま

よくこんな話を聞く。

父母、そして祖父母……こんな具合に直系の祖先を計算してみると、二十代前で百四万人、三十代になると十億四千万人。累計では、二十四億もの父母が数えられる。

今の人一人が、それだけのご祖先さまのおかけで、今の生存があるわけである。狭いこの日本に、代々住んできたのだから、しかも、一人一人がこれだけの親を持つてゐるのなら、どこかで絡み合い、親戚関係を結んでいとすれば、少なくとも日本みんなどこかで関係しあい、絡み合つて、日本中みな兄弟、親戚ではないか。「四海のうちみな兄弟」と。

この事実は、本当にどう。しかし、いのちの継承というものは、そんなに単純ではない。早い話が、私。私には、たしかに父母はいたが、幼くして亡くなり、義理の父母に大切に育てられた。また、思春期には、姉の世話になり、良し悪し影響を受けた。こんなにしていのちを育てられた人は、案外多い。他人間関係でも、例えれば、先生・友人・恋人などたくさん影響力の親を「因」とみてきた。たくさんの因と縁の絡み合う中で、実は、わたしの今のいのちはある訳である。逆に、そのうち一つの縁が欠けたら、今のわたしは存在しなかつたかもしれない。

今、その不思議な縁を考えず、単純に直系だけをたどって、「わたしのご祖先様は……家系は……」「わたしの血筋は、万世一系」などといふのは、いのちの不思議さを見ない妄想と言わざるを得ない。

ところが、この日本では、古代からこの「家

系」「血筋」「家柄」尊重の伝統によつて成り立つてきた。例えば、万葉の若者が恋を呼びかける時も、

名のらせ 家のらせ

(さあ、あなたの名前を名乗りなさい。家の名前を、名乗りなさい。万葉集一卷の十)

さて、この家系尊重主義は、日本の天皇家中心の風潮を生みだし、特に近代になると、国家神道（伊勢神道）に裏付けられた天皇制。それに、軍国主義が結びついて起つた、近代日本の「侵略國家」の足取りを、いまこそ深刻に顧みるべきではないかと考える。（文責 前住職）



法語カレンダー十月（HPより抜粋）  
にだ 念仏せよ 念仏せよ

## 大悲回向

### 南無阿弥陀仏

梅原真隆氏は、明治十八年、富山県の本願寺派専長寺に生まれました。龍谷大学に学び、研

鑽をつみ、同大学の教授となります。しかし、校内の改革問題の責任を取り、大学を去ります。

その後、教化活動を展開し、勧学となり、宗教参議院議員、富山大学学長も務めました。以上のように、真宗の研究や伝道だけでなく、行政的な仕事でも活動された生涯は、私たちからは、想像もできません。（中略）

さて、「火宅無常」の世の中で、私たちは、損得の計算をして「どうせ……しても」などと言葉を発し、自分のやる気のなさを正当化して今を適当に生きているのかもしれません。あろうことか、他者にも「どうせ……しても」といい、身勝手な自分の価値観に他者を巻き込んでいます。そうではなく、人としてのいのちを「せつかく」恵まれ生まってきたのです。それぞれのご縁の中で、精一杯生きていかなければ、いのちを粗末にしていることになります。

「お念佛をよろこんで生きて」いくことは、智慧と慈悲を喜びながら、「せつかく」恵まれた今日のいのちのご縁を大切にすることであり、他者や社会のために恩すことだろうと思います。

それは、生きることにも死すことにも執着しない姿かもしれません。

今月の言葉に通じます。

（内藤 昭文）

どすん

最近あつた「うれしいこと」一数日前、近くのスーパーに買い物に行つた時のことです。買い物を終えて帰りかけた店の出入り口で、近所に住んでおられる老婦人とお会いしました。その方は、一人で暮らしておられ、近年、体調を崩されることがあつたので、

りかけた店の出入り口で、近所に住んでおられる老婦人とお会いしました。その方は、一人で暮らしておられ、近年、体調を崩されることがあつたので、

「お変わりないですか？」  
と、お声をかけました。すると、いつもなら、すが、そのときは、

「はい、おかげさまで」  
と言いながら、少し近況を話してくださいました。すると、いつもなら、すが、そのときは、

「ちよつと、これ見てもらえますか？」  
と、衣料品コーナーへと私を案内されます。聞けば、店頭に並ぶカジュアルなシャツを一枚、普段着にするために買い求めようと思うのですが、どちらの色にしようか迷つておられたのだそうです。そこに、ちよつと私が声をかけたので、アドバイスがほしいとのこと。二人で、季節のことを考えたり、顔映りを見たり、着回しを想像したり……迷つていた一枚だけでなく、他のまでも比べて、ああでもないこうでもないとおおいに盛り上りました。結局、「やっぱり、最初に、決めておられたのがいちばんいいね」ということで、二人の意見が一致して、老婦人は、

おいに盛り上りました。別れた後の帰り道、私は、なんとなく心がほつこりあたたかくなりました。

多分、私と出会わなかつたとしても、あの方は、同じシャツを買い求められただろうから、私と出会つて何かが変わつたわけではないでしょう。でも、トンと背中を押す者がいたことで、そのシャツに手を通すとき、ほんのわずか自信が持て、いつもより少し胸を張つて着てもらえたかもしれないなと思うのです。（文責 坊守）